

『精子ドナーの縁結び』

○SNSの画面

『#精子ドナー』とタグ付けされた投稿の数々。『東大出身』『身長180cm』などのプロフィールが並ぶ。

男性の声「一部の大学でも精子提供は行われていますが、対象は夫婦のみで、貴方のような選択的シングルマザーや同性愛カップルには提供されていません」

○カフェ・店内

藏澤とう子（37）、スマホでSNSを見ながら男性の話を聞く。

男性「そんな現状を知って、私でもお役に立てないかと思い、投稿を始めたのです」

とう子、不機嫌に、聞こえるような溜め息。

男性「…お断りされても結構ですよ」

とう子、冷たく男性を見遣る。

男性は柳康介（66）、紳士的な服装だが白髪の高齢な男だ。

柳 「年齢は載せているのですが、私に応募される方はそれを見落としている様で」

とう子 「（冷たく見遣り）……」

柳 「私はこうして、お話し出来るだけでいいのです。昨年、定年を迎えて人との交流も減りまして。今は児童養護施設でボランティアをし、街の清掃活動にも参加しています。新しい出会いは実に楽しい」

とう子、黙ってテーブルの上を指す。

柳 「？」

とう子 「年齢は関係ない。それより、次の手はまだかしら」

柳 「ああ……」

と、テーブルを見遣る。

とう子と柳はチェスをプレイしていた。

柳、一手指すと、とう子は瞬時に駒を

動かす。

柳 「（苦境で手が進まず）……」

とう子 「早くして貰えないかしら。次の約束もあるの」

柳 「かなり手練れてらっしゃいますね」

とう子 「まだ始めたばかりよ」

柳 「またまた、ご謙遜を（笑）」

とう子 「本当よ。精子提供を受けると決めてから始めたの」

柳 「それは、どういった理由で？」

とう子 「指しながら喋れないの」

柳 「おっと失礼」

と、指して、手で話しを促す。

とう子 「（溜め息で）こういうのって、咄嗟の分析力や判断力が問われるでしょ。しかも日本人には馴染みがない。私と五分の条件で勝負して勝った相手なら、私より優秀だと証明されるわ」

柳 「では、貴方はチェスで相手を選ぶと？」

とう子 「提供ボランティアには学歴を偽る輩もいる。だからキチンと見極めたい」

とう子、クイーンを指す。柳のキングを追い込んでいる。

とう子 「子どもには私より優秀な遺伝子を与

えたいの」

柳 「ハハ、なるほど。さすが慶誠大学の講師であられますね。考えがすっかりしてる」

とう子は駒を片付けながら。

とう子 「あら、皮肉かしら」

柳 「いえいえ、本心です」

とう子 「いいわよ、言っても。『お前みたいな奴に育てられたら、子どもが可哀想だ』
負けた奴らは悔し紛れに言うの。男っていつもそう。一方で負けたら、別の方面でマウントを取ろうとする」

柳 「しかし、聞く余地はあります。貴方はシングルで産むと仰った。子どもだって優しいお母さんを望むでしょうね」

とう子 「優しい？ では優しくない女は子どもを産むなと言う事かしら。生まれ持った性格よね。どうしろと言うの」

柳 「それは誤解です」

とう子 「は？」

柳 「人は優しさを性格と捉えています、

そうではないのです。経験を積みれば、誰でも優しくなれます」

とう子「……何を言ってるの」

柳「少し肩の力を抜いて、笑顔を心掛ける
といい」

とう子「信用するに足りないわ。同じことを
何度も言われた。教授や同僚、果ては警備
員まで。世の人間はどうして教えたがるの
かしら。私より優秀ではないのよ」

柳「ハハ、溜まってますね」

とう子「貴方も同じよね」

と、駒を見せる。

柳「(絶句して)……」

とう子「誰でも優しくなれるなんて、バカげ
た論理……(と、時計を見て)……って、もう
こんな時間じゃない」

と、急いで駒を片付ける。

柳、苦笑し、残った駒を動かす。ルー
クとキングを入れ替える。

柳「このルールをご存知ですか」

とう子「なに？　ギャレットよね」

柳「貴方は13手目でこれをするべきでした。その方が早く勝てた」

とう子「は？」

柳「実は、定年前は家電メーカーの営業を
していました。取引先とよく相手を」

とう子「！」

柳「大事ですよ。笑顔は」

と、ニッコリ。

とう子「でも、負けたわよね」

柳「え？」

とう子「負けは負けだから」

柳「（苦笑）……」

○高級ホテル・ラウンジカフェ

とう子、男Aとチェスをする。

とう子「（イライラと）チェック！」

○カラオケ店・個室・中

とう子、男Bとチェスをする。

とう子 「（マイクで）チェック！」

○居酒屋・店内（夜）

とう子、男Cとチェスをする。

とう子 「はい、アンタの負けえー」

男C 「……」

とう子 「高学歴のくせに揃いも揃って。提供

ボランテニアにはロクなのがいないわね」

と、オレンジジュースを飲む。

男C 「ふざけんなよ！」

とう子、ビクツとして、ジュースを零

す。服にシミがつく。

とう子 「あ」

男C 「こっちはお前に協力してやるんだよ。

さつきから何なんだ、その態度」

とう子、負けじと。

とう子 「語彙力のない脅し文句ね」

男C 「ああ！」

とう子 「（ビクツ）……」

○藏澤家・全景（夜）

古びた一軒家。

○同・LDK・中（夜）

とう子、震える手でカップ酒を一気に飲む。ホッと一息つく。

とう子のスマホにメールの着信。

とう子、画面を見遣る。

『明日は宜しくお願いします。僕のプロフィール、気に入ってくれて嬉しいです』の文面と共に自撮り画像。

とう子「……バカ丸出し」

○百貨店・おもちゃ売り場

とう子と柳がいる。

柳「もう一度、勝負を？」

とう子「二人がやった事ないもので。将棋、

囲碁、麻雀、何でもいいわ」

柳「もう勝負はついたので？」

とう子「アレは手を抜いたんでしょ」

柳 「え？ ああ……」

とう子 「もうウンザリなの。提供ボランテイアはバカばかり。それに約束の場所はホテルや居酒屋。身体目的なのが透けて見える。こっちは事前に、シリンジ法にしたいと伝えていているのよ」

柳 「（聞いて）……」

とう子 「少なくとも貴方は紳士的だった。もし私との勝負に勝てたら、貴方を選んでもいいわ」

柳は困ったような笑み。

とう子 「（何あると察し）え？」

柳 「アレは、営業のテクニクです。自分の主張を通したいなら、こちらのペースに持って行く必要があるのです」

とう子 「じゃ、アレはハツタリ？」

柳 「なので、もう勝負はついているのです」
とう子 「……ウソよね」

柳 「え？」

とう子 「あの後、対局を分析したの。貴方の

言う事は理にかなっていたわ」

柳 「！」

とう子 「何故そんなウソをつくのかしら。やっぱり本音ではこう思ってるのね。お前に育てられたら子どもは可哀想だ」

柳 「いえ、そういう訳ではなく、これは個人的な理由なのです。確かに投稿はしてるのですが、子どもを作るのにまだ迷っていて、踏ん切りがつかないのです」

とう子 「言い訳はいいわ。結局私と子どもを作る気はないのよね」

柳 「あ、あの、子どもが見ています」と、指す。

小さな男の子が不思議そうに見ている。

とう子 「……もういい。まさか断られるとは思わなかった」

柳 「申し訳ない。何かお詫びを」

とう子 「いらない」

柳 「そうだ、いい人を紹介します。妻の親戚でとても優秀です。その家はみんな顔

立ちもいい」

とう子「男はいらない。子どもが欲しいの」

柳「まだお若いのに、それは勿体ない」

とう子「もう37よ。恋愛？ キュン？ 似合わない」

柳「そんな事ありません。貴方は魅力的だ」

とう子「やめて、お世辞なんて」

柳「本心です。お綺麗ですし、芯もお強い。頭もいい」

とう子「……（満更でもない笑み）」

柳「それに、私は縁結びが得意です。

久々に腕を發揮したいものです」

とう子「そう……でも、折角だけお断りするわ。恋愛はしたくないの。母に刷り込まれてしまったから」

柳「それは、どういう意味ですか」

とう子、何だか寂し気な笑み。

柳「……」

とう子「ごめんなさい。もう少し提供ボランティアを続けてみるわ。でもありがとう。

少し気が楽になったわ」

柳 「あ、いえ……」

とう子、去って行く。

柳 「（見送って）……」

○慶誠大学・全景

○同・とう子の部屋・中

テーブルの上のチェス盤。

を、虚ろに見ているとう子。

ノックの音がする。間髪入れず、学生

の夏川翔大（22）が入って来る。

とう子 「（ムッ）それ、ノックの意味ある？」

夏川 「レポートの直し、持ってきました」

とう子、レポートを奪い、見て。

とう子 「ちよつと、全然直ってないじゃない」

夏川 「こつちの方が正しいんで」

とう子 「どうして人の話を聞かないの」

夏川 「（遮り）ってか、先生もやるんすね」

と、チェス盤を指す。

とう子「ね、話しを逸らさないで」

夏川「ってか、先生、最近迷走してますね。

ブランドの服着だしたと思ったら、今度は
チェスですか。似合わねー」

とう子、眉間に皺を寄せるも、笑みを
見せて。

とう子「やってみない？」

夏川「いつすよ。暇ですし」

とう子、悪い笑みで夏川と対峙する。

二人は駒を並べていく。

とう子「違う。ナイトはここ」

夏川「タイマーは？」

とう子「ん？ え？」

夏川「折角ですし、本格的にやりましょうよ」

とう子「いいけど、タイマーはないの」

夏川「じゃ、同好会の奴に借りてきますよ」

とう子「（余裕の笑み）お願い」

夏川は部屋を出て行く。

パターン、扉が閉まると。

とう子、焦ってスマホで検索する。

○カフェ・店内

とう子と柳が話す。

柳 「え、相手が見つかったのですか」

とう子 「（項垂れて）そうなの……まさか、

あの子が私より優秀なんて……」

柳 「相手はおいくつなのですか」

とう子 「22よ。若造で生意気。何考えてる

か掴めないの。だからお願い」

柳 「お願い？」

とう子 「精子提供してくれる様に、説得して

欲しいの」

柳 「！」

とう子 「営業をしていたのよね。交渉事は得

意でしょ。褒め殺しも得意だし」

柳 「無理です。相手は提供ボランティアで

はないのですよね」

とう子 「だって他に手がないのよ」

柳 「いっそお付き合いされてはどうですか」

とう子「へ？」

柳「学生といつても成人していますし、隠れて付き合えば問題ない。縁結びでしたら私だって自信があります」

とう子「ダメよ。職場倫理に反する」

柳「……精子提供は良いのですか」

とう子「それは……セーフよ。だって、シリンジ法よ。ボランティアを受けるだけ」

柳「ご自分が信じていないモノを、人は信じませんよ」

とう子「兎に角やって。必要なら頭を下げる」

柳は難しい顔をする。

とう子、逡巡し、何か思いついて。

とう子「あの、私ね、その、貴方みたいな人に会ったのは初めてなの」

柳「え……」

とう子「貴方は凄いわ。だって、えっと、貴方と話すと、すっと気持ちが開くの。自然に自分の事を話してて。貴方なら絶対にこの交渉は成功できるわ」

柳 「（苦笑）お世辞にはまだ慣れませんか」

とう子 「お世辞じゃない。本心よ」

柳 「そんなに恋愛がお嫌いですか」

とう子 「（絶句）……」

柳 「……お母様の事伺っても？」

とう子 「え？」

柳 「少し気になってまして。原因があるのなら、それを取り除いて差し上げたい」

とう子 「……大した事じゃないの」

柳 「（笑み）そうですか？」

とう子 「（苦笑）母は……そうね、多分、寂しかったんだと思う。きっと私の父親に捨てられたのね。男に対して恨みも凄くて、私への執着も凄かった」

柳 「（聞いて）……」

とう子 「男がどれだけ嫌なモノか、子どもの頃から刷り込まれたわ。学生時代にはもう、男に対して嫌悪と恐怖しかなかった。大人になっても同じ。どうしても湧き上がる」

柳 「そうでしたか……」

とう子「酷い母よね。行動も制限されたわ。

外泊はダメ、外食もダメ。家を出ようともしたけど、結局上手くいかなかった」

柳「お母様と話しましょうか」

とう子「あ、ううん。今は自由なの」

柳「え？」

とう子「お酒もね、飲めるようになったの。

色々試したけど、私には日本酒が合うみたい。アレ美味しいわよね。カッブ酒」

と、屈託なく笑う。

柳「……あの、お母様、今は？」

とう子「あ、えっと……兎に角、私には無理なの。付き合うとか。でも家族は欲しい。

ちゃんとした家族が」

柳「……」

とう子「だからお願い」

柳「……日本酒の美味しい店を知ってます。

彼を誘ってみてください」

とう子「え……」

柳「難しい交渉には、お酒が一番の潤滑油

になります」

とう子、ペアと笑みが広がる。

○慶誠大学・廊下

とう子と夏川が話す。

夏川「嫌ですよ」

とう子「ちょ、どうしてよ!？」

夏川「どうして二人で飲みに行くんですか」

とう子「二人じゃない。三人。日本酒が豊富

なお店みたいよ」

夏川「僕はウイスキー派です」

とう子「ウイスキーね。わかった。セッテイ

ングして貰う」

夏川「あの、しつこいと事務局に訴えますよ。

セクハラで」

とう子「!」

夏川、去って行く。

とう子、もう追えず、地団駄を踏む。

○同・学食・中(夕)

夏川、スマホを見遣る。

『どうして連絡くれないの』のメール。

夏川、腕のブレスレットに触れる。

夏川「……ん？」

夏川の元にとう子と柳がやってくる。

柳「初めまして。柳と申します」

と、名刺を差し出す。

夏川「（受け取り）はあ……」

とう子「（周りを気にし）私は反対したのよ」

柳「夏川さんの仰る通り、呼びつけるのは

失礼かと思い、こうして参上した次第です」

夏川「あー、貴方、昼間先生が言ってた……」

柳「こちら、お近づきの印にどうぞ」

と、紙袋を渡す。

夏川「え、何すか、これ」

柳「ウイスキーです。好きだと伺ったので」

夏川、中身を取り出して。

夏川「へー」

とう子「ちよっと、出さないで。しまつて」

柳「それで、本題ですが……」

とう子 「(遮り) ここではやめて」

夏川 「これ、試しに飲んでいっすか」

とう子 「話聞いて！」

○同・男子トイレ・外(夕)

とう子、待っている。

中から柳と夏川の声が聞こえる。

夏川の声 「何であんなのと子ども作らなきゃいけないんですか！」

柳の声 「夏川さん、聞いてください……あ」

夏川、トイレから出てくる。

とう子と夏川、目が合う。

とう子 「(苦笑) いや、『あんなの』って」

夏川 「先生、よく好きでもない人と子ども作れますね。頭の中どうなってるんですか」

とう子 「だから、まずは話を聞いて」

夏川 「バカですか。ってか、ビッチっすか」

とう子 「だから、勝手に決めつけないで！

こっちはさんざん悩んで出した結論なの！」

柳、出てくる。ギョツとして。

柳 「藏澤さん、落ち着いて。深呼吸」

と、スーハーと見本を見せる。

とう子 「（柳に）だってこの子が（夏川に）

ね、子どもを作るには、取り込まなきゃいけないの。自分の体に。男のDNAを。想像しただけで吐き気がする。そんな私にビッチですって？（柳に）スーハー、邪魔」

夏川 「これもうセクハラです！」

とう子 「！」

夏川、急ぎ足で去って行く。

とう子 「ま、待って。事務局に訴えないでよ」

夏川は答えず姿を消す。

とう子、真っ青になる。

柳 「藏澤さん、相手に腹を立ててはいけません。交渉は冷静に。腹が立つ時は、深呼吸で心を……」

とう子 「（遮り）彼、本気かしら」

柳 「はい？」

とう子 「事務局に訴える気よね。そんな事さ
れたら、私の人生終わりよ」

柳 「大丈夫です。彼もそこまではしないでしょう。それに交渉はまだまだこれから」
とう子 「……やっぱり、交渉は中止にしまし
よう。そうだ、謝りに行かないや」
柳 「藏澤さん、聞いてください」
とう子 「謝るの！」

○同・敷地外・道路（夕）

とう子と柳がいる。

とう子は長文の謝罪メールを打つ。

柳 「だから謝罪メールは必要ないので」
とう子 「彼は以前、しつこいと訴えるって」
柳 「彼だって、告発すれば藏澤さんがどう
なるかくらいわかるはずです。そこまでは
しません」

とう子 「確証はない」

柳 「こちらが弱腰だと相手のペースに乗せ
られてしまう」

とう子 「だから、交渉はもう中止なの」
と、送信ボタンを押そうとして。

柳 「少しは信用してください」

とう子、ピタッと指が止まる。

柳 「私を信用してくれたから、頼みに来てくれたのではないですか」

とう子 「それは、そうだけど……でも、不安なの。クビになって転職して、経済力が落ちたら、子どもは産まない」

柳 「……」

とう子 「子どもには不自由させたくないの。お金がないから諦めて、なんて、絶対言いたくない」

柳、深呼吸をして。

柳 「……わかりました。どうぞ。謝罪でも何でもしてください。ただし、メールはダメです。キッチンと。対面で」

とう子 「……怒った？」

柳 「怒ってません。交渉も中止されて結構。

また提供ボランティアをお探しなさい」

とう子 「あの、勿論、柳さんを信用してる。

私は父親をよく知らないけど、きっとこん

な感じなのかとも思うの」

柳 「（横目で見遣り）……」

とう子 「ただ、考えは変わらないわ」

柳 「……」

○慶誠大学・とう子の部屋・中

とう子と夏川がいる。

とう子 「昨日は本当にごめんなさい。これ、お詫び。美味しいのよ、このあられ」

と、紙袋を渡す。

夏川 「（冷たく見遣り）……ども」

とう子 「あの、事務局に訴えたりしない？」

夏川 「元々そんな気ないですよ」

とう子、目を丸くして。

とう子 「え、そ、そうなの？」

夏川 「つてか、あの話はナシでいいですね」

とう子 「勿論よ。あ、でも誤解は解きたい」

夏川 「誤解？」

とう子 「私の貞操観念はちゃんとしてる」

夏川 「（苦笑）ああ……」

とう子「自分の気持ちは二の次なの。子どもには優秀な遺伝子を与えたい」

夏川「どうして優秀にこだわるんです。それ

じゃデザインナーズベイビーじゃないですか」

とう子「だって、人生って辛いじゃない」

夏川「え……」

とう子「辛い状況を打開するには、考えるしかない。考え抜いて、最良の選択を見つめるしかないの。私にはそれが出来なかった。だから子どもは私より優秀であって欲しい」

夏川「……よくわからないのですが、先生は僕を買い被り過ぎです。そんなに優秀じゃありませんよ。父の母校には入れず、失望されています」

とう子「（笑）何言ってるの、優秀よ」

夏川「え……」

とう子「もっと自信を持つべきね。貴方の優秀さは学歴では測れないわ」

夏川「……どうしたんですか」

とう子「？」

夏川「今まで褒めるなんてしなかったじゃないですか。似合わないっすよ」

とう子「ウソよ。褒めてるわ」

夏川「（微笑）……」

夏川、そっとブレスレットを外し、

夏川「子どもの件、考えてもいいですよ」

とう子「ん？ え！？」

夏川「ただし、条件があります」

とう子「なに？ 何でも言っつて」

夏川「僕と付き合ってください」

○バー・店内（夜）

テーブル席にとう子、柳、夏川がいる。

柳「それは、どういった心境の変化で」

夏川「何で貴方がしゃしゃり出てくるんです」

柳「私もそう思うのですが……」

と、とう子を見遣る。

とう子、『話して』と顎で指示する。

柳「交渉は私に任せると」

夏川「（とう子に）ってか、先生の気持ちは

「どうなんですか」

柳 「私としては、応援したい気持ちもあります」

夏川 「は？」

とう子 「！！！」

柳 「貴方が藏澤さんと付き合ってくれら、私は万々歳です。彼女には男性と交際する喜びを知って欲しい」

とう子 「深呼吸をして、冷静に。」

とう子 「フェアじゃないわ。子どもと引き換えに、私に付き合えだなんて」

柳 「とう子を見遣り、微笑して。」

柳 「そうですね。だから味方はできない」

夏川 「どっちなんですか」

柳 「誠実なお付き合いをされるなら」

夏川 「勿論、大事にしますよ。身体の関係だつて、無理に求めません」

柳 「好きなのですか。彼女のこと」

夏川 「な訳ないでしょ」

とう子 「どういうこと？」

夏川 「形だけ付き合つて貰えばいいんです。

一定期間。デートはして貰います」

とう子 「何か裏がありそうなのよね」

柳 「ここは、男同士で話しませんか」

夏川 「嫌ですよ」

とう子 「わかった。私が席を外すわ」

夏川 「え、ちよつと……」

とう子は去って行く。

柳 「恋人と何かあったのですか」

夏川 「え？」

柳 「以前はブレスレットを」

夏川 「……あの、先生には」

柳 「勿論、秘密にします。真剣に藏澤さん

との交際を考え、恋人と誠実な形で別れる
のであれば」

夏川 「……」

柳 「それに、その恋人が同じ大学なら、藏

澤さんの立場も悪くなりそうだ」

夏川 「それは、大丈夫です。あつちは年上で、
もう働いてますし」

柳 「なら、よかった」

夏川 「それに、僕は別れたいんです」

柳 「でも別れられない」

夏川 「しつこくて」

柳 「それで藏澤さんとお付き合いをし、彼女に諦めさせようと」

夏川 「あ、でも、先生さえ良ければ、その後も付き合います」

柳 「ですが、腑に落ちません。そこまですなければ別れられないのですか」

夏川 「も、いいでしょ。この話は」

柳 「まさか妊娠でも？」

夏川 「！」

柳 「……そうなのですね……」

夏川 「でも、まだ墮ろせるんです。それなのに結婚を迫る方がおかしくないですか」

柳 「……子どもの件はなかった事に」

夏川 「ちょ、待ってください」

柳 「貴方は責任を放棄する為に、藏澤さんを利用しようとしているのです。男として

それはするべきではない」

夏川 「それは……そうなのですが」

柳 「恋人とはキチンと向き合うべきです。

それが誠意というものです」

夏川 「た、確かに、そうですよね……」

柳 「藏澤さんには私から」

夏川 「あ、そ、それは僕から」

柳 「（訝しげに）……」

夏川 「先生には、キチンと謝るべきですよね。

男として」

柳 「……わかりました」

○繁華街の道（夜）

とう子と柳が話す。

とう子 「どうして断ったりしたの！？」

柳 「理由は彼から」

とう子 「柳さんに聞いてるの」

柳 「それは申せません。彼と約束を」

とう子 「ね、以前、自分を信用しろと言った

わよね」

柳 「え？ ええ」

とう子 「なのに勝手に交渉を断った。相談もなく、理由も言わない」

柳 「……」

とう子 「夏川君は事務局に訴える気なんてなかった。柳さんの言う通りだったわ。私はもう信用しているのよ」

柳 「……とにかく、これがベストな選択なのです。信じてください」

とう子、不満げに柳を睨む。

○慶誠大学・講堂・中

講義が終わり各々去って行く学生たち。
とう子も支度をしていると、夏川がやってくる。

とう子 「（見ずに）……なに？」

夏川 「あいつから何か聞きました？ えっと、

柳さん、でしたっけ」

とう子 「ね、ここではやめて。私の部屋で」

夏川 「何か聞きましたか」

とう子「……（仕方なく）何も」

夏川「（ホッ）そうですか」

とう子「ね、（小声で）何があったの」

夏川「先生、週末空いてますか？」

とう子「へ？」

夏川「空いてますよね。デートしましょう」

とう子「え、交渉はご破算になったのよね。

だって柳さんが……」

夏川「これって、僕らの話しですよ」

とう子「そうだけ……」

夏川「その人の話なんて、聞く必要あるん

ですかね」

とう子「でも、私は彼を信頼してる」

夏川「子ども、諦めてもいいんですか」

とう子「！」

夏川「先生は僕を疑っているんですよ。何

か裏があるんじゃないかって。でも先生に

迷惑をかけるような事は絶対にありません」

とう子「……本当に？」

夏川「ええ」

とう子「……」

○遊園地・全景

とう子と夏川がいる。

とう子「何故、遊園地……」

夏川「どこがいいか考えたら、やっぱここだ
なつて」

とう子「何故……」

夏川「まあ、行きましよう」

と、歩いて行く。

とう子、何だか虚ろについていく。

夏川「気に入りませんでした？」

とう子「え？ あ、いや、違うの」

夏川「じゃ、どうしたんですか。今日はずつ

と不機嫌ですよね」

とう子「……あまり好きじゃないのよ。こう

いう、デートみたいなの。二人で楽しい雰

囲気を作らなきゃいけないし」

夏川「そんなゴチャゴチャ考えなくても……

そうだ、じゃ一発目はアレ乗りましよう」

とう子「え？」

○疾走するジェットコースター

で、絶叫するとう子、夏川。

○同・出口

足の震えたとう子に夏川が、

夏川「ゴチャゴチャは吹っ飛びました？」

とう子「（首を振る）……」

夏川「じゃ、もう一回」

とう子「へ！？　ウソでしょ！？」

○疾走するジェットコースター

で、絶叫するとう子、夏川。

とう子、ふと気づく。

夏川は怯えた顔で引きつっている。

とう子、思わず笑って……。

○観覧車・中

とう子、笑って夏川に、

とう子「すっごい顔してた、こんな感じ」

夏川「そんな顔してません」

とう子「（笑い終え）苦手なのに、付き合ってくれたのね」

夏川、照れて外を見遣り。

夏川「もうすぐ富士山見えますよ」

とう子「詳しいのね。恋人とでも来たの？」

夏川「父です。子供の頃、珍しく二人で」

とう子「（微笑）お父さんって、どんな人？」

夏川「調子に乗ってます。ずっと。人を蔑む

とこしか見た事ない。来年にはそいつの会

社に入るんですけど、今から気が重いです」

とう子「へー、お坊ちゃんなんだ」

夏川「やめてくださいよ。そっちはどうなん
です？」

とう子「え……？」

夏川「ご両親はどんな人だったんですか」

とう子「……母はキツイ人だったわ。命令口

調で、すぐカツとなる」

夏川「それ、先生みたいですね」

とう子「！」

夏川「あ、でも前の印象ですよ。今は意外と

柔らかい感じですよ。よく笑うし」

とう子「（ホッ）そ、そう……」

と、小さく笑みが毀れる。

○同・敷地内

とう子と夏川、スマホで写真を撮る。

夏川は写真を見て、満足そうな笑み。

とう子「あとで送って」

夏川「ええ」

とう子「あ！　ね、次あれ乗りましょう」

夏川「少し休みましょうよ」

とう子のはしやぎながら行ってしまふ。

夏川、そんなとう子を見遣り、笑みを

こぼす。

○同・外（夕）

とう子と夏川が出てくる。

とう子「時間が経つのはあつという間ね」

夏川 「（微笑） ……」

とう子 「何よ、笑って」

夏川 「子どもが出来たら、連れて来てあげてくださいね。パパとデートした場所だよって」

とう子 「ちょ、何言い出すの」

夏川 「だって一人で育てるんですよ。絶対子どもに聞かれます。パパはどんな人だったのかって」

とう子 「あ、そうね ……考えもしなかった」

夏川 「そんな時、先生には僕の事、笑って話して欲しいじゃないですか。だから先生にはもっと、僕を知って欲しいんです」

とう子 「じゃ、最初に付き合う条件を出したのも、その為？」

夏川、一瞬迷うも、

夏川 「ええ、勿論」

と、爽やかな笑みを見せる。

とう子 「（顔を赤らめて） ……」

夏川 「この後どうします？ ご飯でも」

とう子「(ハツとして)あ、ごめん。もう帰
らなきや」

夏川「え……」

とう子、思わず夏川から目を逸らす。

○道路(夕)

とう子、電話を掛ける。呼び出し音が
続く。

とう子「(ソワソワと)出てよ……」

柳の声「はい」

とう子「柳さん！ 今から会える？」

柳の声「あー、今日は……」

とう子「お願い、少しでいいから」

柳の声「……わかりました。では、うちに来
て貰えますか」

とう子「うん、わか(った)……え、うち？」

○高級マンション・全景(夜)

○同・柳家・LDK・中(夜)

奥さんの写真が飾られた祭壇。
数人の親族が食事をしている。

とう子の声「ごめんなさい。奥さんの一周忌
だとは知らなくて……」

○同・寝室・中（夜）

とう子と柳がいる。

柳「構いません。それより、どうしたので
すか」

とう子「その、冷静になりたくて。柳さんと
話すと、心が落ち着くから」

柳「お茶でも煎れてきましょう」

とう子「待って、まずは謝りたいの」

柳「？」

とう子「今日、夏川君と遊園地に」

柳「！」

とう子「ごめんなさい。事前に相談するべき
だったわ」

柳「まさか、楽しかったのですか」

とう子「ええ……あ、いえ、全然、全く」

柳 「楽しかったのですね……」

とう子 「も！ やめて！」

と、思わず声が大きくなる。

とう子と柳、弔問客を気にして。

とう子 「とにかく、冷静になりたいの」

柳 「そうですね。そうするべきです」

とう子 「もう……自分が情けない。相手は学

生なのに……」

柳 「外の空気を吸いましょう」

と、窓を開ける。風が入る。

とう子の髪が揺れる。

とう子 「……」

柳 「やはりお茶も」

とう子 「いいの。少し落ち着いたわ」

柳 「そうですか？」

とう子 「それにしても、いいお部屋ね。素敵」

柳 「え？ ああ、妻の稼ぎがよくて」

とう子 「奥様はどんな仕事を？」

柳 「大学の講師でした」

とう子 「そうなの？ どの大学？」

柳 「……（小さな笑み）」

とう子 「（察し）え？ え、うちの大学！？」

柳 「30までそこで。その後は別の大学で常勤講師をしていました」

とう子 「なら被ってないのね。残念」

柳 「一度だけ、そちらに伺った事があります。二人で学食にも行きました。当時は別の建物でしたけど」

とう子 「そう……不思議な巡り合わせね」

柳 「実は、初めてお会いした時に、それを感じていました」

とう子 「そうだったのね……」

と、照れくさそうに笑う。

柳 「あの、それで、彼の事なのですが……」
とう子 「も、やめてよ」

と、無邪気に笑う。

柳 「……」

○慶誠大学・外の道（朝）

とう子、ウキウキと歩く。

一人の女性がとう子の前に立ち塞がる。

とう子「？」

女性はスマホを見せる。

そこに遊園地で撮ったとう子と夏川の
写真がある。

とう子「！」

女性「（睨み）……」

とう子「（青ざめて）……」

○同・講堂・中

授業前。生徒たちが各々準備をする。

とう子、やってくる。

夏川と目が合う。

夏川は小さく手を振る。

とう子、迷うも、小さく手を振る。

夏川、屈託のない笑み。

とう子「……」

○高級マンション・柳家・玄関・中（夜）

とう子を出迎える柳。

柳 「どうかされましたか」

とう子 「……」

柳 「（察して）……聞いたのですね」

とう子 「やっぱり、知っていたのね」

柳 「その、本当は早くお伝えすべきだったのですが……私も、どうしたらいいかわからなくて」

とう子 「それはいいの。そうよね。柳さんは優しいから、私を傷付けることしたくなかったはずだし」

柳 「いえ、それでも伝えるべきでした」

とう子、言い辛そうにするも口にする。
とう子 「問題ないわよね」

柳 「え……？」

とう子 「このまま夏川君と子どもを作っても」

柳 「！」

とう子 「だ、だって、彼はボランティアよ。提供ボランティア。SNSで出会ってたら、何も問題ない。相手の事情なんて考慮する必要ないわよね」

柳 「それとは違います。彼の恋人の気持ちも考えてみてください。自分は彼に捨てられ、その彼は貴方と子どもを」

とう子 「だけど……」

柳 「藏澤さんもわかっているはずですよ」

とう子 「でも！」

とう子、ハツとして、深呼吸をする。

柳 「……」

とう子 「そうね。確かにそう。柳さんが言う事は正しい。貴方はいつも正しい」

と、再び深呼吸をする。涙がポロポロと溢れてくる。

柳 「怒ってらっしゃるんですよね。私に。

仰ってください」

とう子 「……私は夏川君を選んだ。貴方に交渉を頼んだ。全部自分が蒔いた種よ。貴方を責める謂われはないわよね」

柳 「そういう事ではないのです。そうやって抱え込まないで、お気持ちをぶつけて頂いた方が、こちらとしても……」

とう子「柳さんが教えてくれたのよ。これが
優しさでしょ」

柳「！」

とう子「でも、少し窮屈よね。感情を殺して。
これじゃ、母といた時と変わらない」
と、逃げる様に去って行く。
取り残される柳。俯く。

○慶誠大学・外の道

とう子、トボトボとやってくる。
とう子の前に立ちはだかる人物。

夏川だ。

夏川「先生、少しいいですか」
とう子、毅然と夏川を見遣る。

○同・とう子の部屋・中

とう子と夏川がやってくる。
とう子「なに？」

夏川「昨日、あいつ、待ち伏せしてて。聞き
ました。先生は身を引いたって」

とう子「そうよ。だから精子提供の話はもう
ナシ。以上」

とう子のスマホにメールの着信。

とう子、スマホを見ようとすると、夏
川がその腕を取る。

夏川「あいつとは別れました」

とう子「！」

夏川「ウンザリです。もう何の迷いもありません」

とう子「あの、ちよつと……」

夏川「付き合いますから。僕たち。いいですね」

とう子「ね、落ち着いて聞いて」

夏川「（フツと笑い）聞く訳ないじゃないですか。何を言おうとしてるか分かるし」

とう子「だったら……」

夏川「（遮り）先生が身を引いても、あいつとよりを戻す気はありません。気にしないでいいんです」

とう子「……」

夏川「考えておいてください。ゆっくりでいいんで」

と、去って行く。

とう子、ハツとしてメールを見る。

柳からで『今晚お待ちしています』の文面と共にお店のURLがある。

とう子「……」

○和食店・個室・中（夜）

柳、待っている。

ノックの音がする。

柳、笑みが毀れ、顔を上げる。

やってきたのは店員で。

店員「すみません。閉店のお時間です」

柳「……（苦笑）お会計を」

○道路（夜）

柳、歩く。ふと、気づく。

通りに面した公園に、とう子がいる。

○公園・中

とう子、俯いて座る。

柳がやってくる。

とう子「あ……ごめんなさい。その、会う前に考えたくて」

柳「（微笑）そうですか」

とう子「お店、今からでも行きましょう」

柳「もう閉店です」

とう子「え！？ もうそんな時間？」

柳「来て頂けただけで嬉しいです。昨日は本当に申し訳なかった」

とう子「こっちも申し訳なかったわ」

柳「謝る事はありません」

と、とう子の隣に座る。

とう子「……柳さん、提案があるの」

柳「？ 提案ですか」

とう子「提供ボランティア、お願いできるかしら」

柳「……は？」

とう子「それが一番いい方法だと思うの」

柳 「（苦笑）何かあったのですね」

とう子 「別に。ただ、未練とは恐ろしいものよね。邪念が凄いの。ドンドン湧いてくる」

柳 「なるほど。ではまずはその未練を断ち切る事ですね。それから前には進めばいい」

とう子 「それは、そうだけど……」

柳 「それと、私はもう子どもを作る気はないのです」

とう子 「え……？」

柳 「投稿も、既に削除しています」

とう子 「どうして？ 何かあったの？」

柳 「個人的なことです」

と、晴れやかな笑み。

とう子 「……でもどうして投稿を始めたの。

子どもを作るのに迷っていたわよね」

柳 「いえ、大した事じゃありません」

とう子 「いつか訊き出そうと思っていたの。

まだ秘密にする気？」

柳 「あ、いえ、あの」

とう子 「残念、信頼してくれないの？」

柳 「ハハ、困りましたね」

とう子 「聞きたいわ」

柳 「……提供ボランティアは妻からの提案
でした」

とう子 「！」

柳 「私達には子どもが出来ませんでした。
当時、悩んでいた妻に、『二人でいれば幸
せだ』と言ったのです。妻は納得して、そ
れからは子どもの話はしなかった」

とう子 「……」

柳 「ですが私の中に諦めきれない気持ちがあ
ったのでしよう。妻はそれを見抜いてい
たのです。彼女が亡くなった後、残された
手紙にそれがありました」

とう子 「そうだったの……」

柳 「私は、妻が幸せだと信じて疑いもしな
かった。ですが……（フツと笑い）難しい
ですね。私は、経験を積みれば誰でも優しく
なれると、本気で思っています。でも、こ
のざまです」

とう子「……でも離婚はしてないんですよ。
少なくとも奥様は幸せだったはずよ」

柳「そうでしょうか」

とう子「こう考えたらどうかしら。奥様は一人残される夫に、幸せの選択肢をプレゼントしたのよ」

柳「！」

とう子「きつとそうだわ」

柳「（微笑）そうだといいいのですが」

とう子「考えてみると面白いわよね。優しいから思い合う。思い合うからすれ違う。でも、すれ違ってても縁は切れない。優しいって、縁結びよね」

柳「ハハ、縁結びは得意です」

とう子と柳、小さな笑み。

柳「そうだ。藏澤さんの未練を断ち切るいい方法があります」

とう子「？」

柳「私、縁切りも得意なのです」

○慶誠大学・とう子の部屋・中

とう子と夏川がいる。

並べられたチェス盤がある。

夏川「もう一度、勝負を？」

とう子「私は貴方より優秀なはずなの」

夏川「どういう事ですか」

とう子「証明して断ち切るわ」

夏川「（苦笑）訳わかんない」

とう子、夏川を席に促す。

夏川、仕方なく座り。

とう子と夏川、チェスをしながら話す。

夏川「それより、返事はもう少し掛かりそう
ですか」

とう子「答えは決まっているわ」

夏川「うわー、断る気ですよね」

とう子「当然よ」

夏川「理由は？」

とう子「失望したの」

夏川「妊娠した彼女を捨てたからですか」

とう子「そうね。それと、貴方はなんだかん

「だって彼女にまだ未練がある」

と、夏川の腕を指す。

夏川はブレスレットをしている。

夏川、バツが悪く、腕を隠す。

とう子「結局、貴方はお父様に失望されたくないのよね。だから彼女を捨てようとした」

夏川「……」

とう子「彼女とよりを戻した方がいいわ。このままお父様に囚われていると、いずれ後悔することになる」

夏川、とう子の手を取る。

とう子「！」

夏川「今日は随分淡々と話すんですね」

とう子「そ、そうかしら」

夏川「気持ちを押し殺してるからですよね」

とう子「違うわ」

夏川「先生、僕の事好きですよね」

とう子「！」

夏川「僕も好きです。両想いですね」

と、笑みを見せる。

とう子、手を離して、視線を逸らす。

夏川「父が教えてくれたことで、一つだけ納得できる事があるんです。大切な人には優しく。それ以外は冷たく」

とう子「……」

夏川「大事にします。先生の事」

とう子、駒を動かす。ルークとキングの位置を入れ替える。

夏川「え、何ですか、それ」

とう子「ギャレットよ。知らないの？」

夏川「ズルじゃないですか」

とう子「夏川君、私、教わったの。人は誰でも優しくなれる。経験を積みば」

夏川「（嘲笑し）何すか、それ」

とう子「（微笑）私もね、始めはそう思った。でも、今はその言葉を信じられる」

夏川「……」

とう子「自分は変えられるわ。そうすれば周りだって変わるの。だってそうでしょう。

夏川君は私を好きになってくれた」

夏川「！」

とう子「私は、今の自分を信じてるの」

と、クイーンを指す。夏川のキングを
追い込んでいる。

夏川「あ」

とう子「やった……」

とう子、晴れやかな笑み。

夏川「……もしかして、フラれました？」

とう子「夏川君、ありがとね」

と、立ち上がり、身支度をする。

夏川「どうしたんですか」

とう子「行く所があるの。思い返して、やっ

とわかったわ」

夏川「え……？」

とう子、部屋を飛び出していく。

○道路

とう子、必死に走る。

○高級マンション・全景

○同・ロビー・中

とう子、呼び出し音を連打する。

返事はない。

とう子、急いでロビーを飛び出す。

○道路

とう子、足早に歩きながら電話をする。

柳は出ない。

とう子、スマホをしまい、走る。

○カフェ・店内

とう子、柳を探す。

電話の着信がある。

とう子「！」

○児童養護施設・全景（夕）

子ども達の遊ぶ声が聞こえる。

○同・正門・外（夕）

とう子、走って来る。

園庭で子どもと遊ぶ柳を見つける。

とう子「あ、柳さん！」

柳はとう子に気付いき、子ども達と言葉を交わしてからやってくる。

とう子、息を整えてそれを待つ。

柳、やってくる。

とう子「あの、ごめんなさい。こんな時に」

柳「いえ。それより、未練は断ち切れまし

たか」

とう子「それより、わかったの」

柳「？」

とう子「あのね……」

と、気付く。

小さな女の子がとう子を見ている。

女の子「このおばちゃん誰？」

柳「いいから。あっちに行つてなさい」

と、促して。

柳「すみません。騒がしくて」

とう子「いいの、それでね……」

サッカーボールが飛んでくる。ガン！

と、門に当たると。

とう子「！」

高学年男子「あ、ごめん」

柳はボールをパスして。

柳「静かな所へ」

とう子「いいの。それより、貴方をお願いがあるの」

柳「（微笑）今度は何ですか？」

とう子「私のパートナーになって欲しいの」

柳、目を丸くする。

とう子「あの、どうかしら」

柳「……申し訳ないのですが、私は妻以外と結婚する気はないのです」

とう子「違う。パートナーよ。私だって失恋したばかりよ。すぐに鞍替えしないわ」

柳「すみません。よくわからないのですが」

とう子「一緒に子どもを育てて欲しいの」

柳「！」

とう子「いいわよね」

柳「すぐには、返事はできかねます」

とう子「いいわ。待つ。待つわ。いつでも。

……やっぱり、お願い。ホントに」

柳「ですが、子どもはどうされるのですか。

また提供ボランティアを？」

とう子「それなんだけど。勿論、貴方と相談

して決めるわよ。でも、養子を視野に入れ

ようと思ってる」

柳「優秀な遺伝子でなくて、良いのですか」

とう子「それはいいの。子どもには経験を積

ませたい。貴方の言う、優しさの」

柳「！」

とう子「どうかしら。受けてくれる？」

柳「……」

とう子「（待つて）……」

柳「……（小さな笑み）」

とう子「ホントに！？ いいのね！」

柳「ただ、一つ懸念が」

とう子「なに？ 何でも言っって」

男の子の声「おい！ 柳い！」

園庭にいる男の子が叫ぶ。

男の子「早く鬼ごっこするぞ！」

柳、苦笑してとう子を見遣る。

柳「私でも少々手を焼いています」

とう子、思わず笑って……。

了